



Japan Medical Development Organization
NGO 日本医療開発機構



Japan Medical Development Organization
NGO 日本医療開発機構

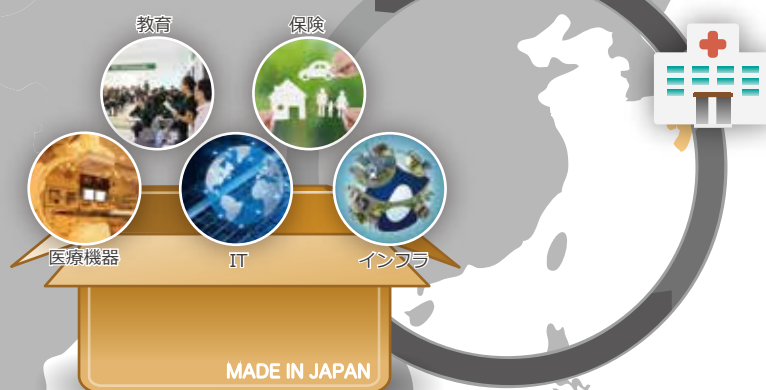
医療を感じるスタディツアー



特定非営利活動法人 日本医療開発機構



「アウトバウンド型医療輸出」 日本も医療途上国も救う「北原グループの海外事業」



医療とは「いかに人がよく生き、よく死ぬか、その全てをプロデュースする総合生活産業である」、北原グループはそう再定義しています。

超高齢化が進み、もはや破綻寸前の日本の医療体制。医療を総合生活産業と捉えることで、破綻を回避する「新しい医療の形」が見えてきます。医療は本来、病院の中だけで行われるべきものではありません。医療機器・保険・電気・水道・給食・農業・ITなど、あらゆるものが人々の健康に関わっていて、医療になりうるのです。

北原グループ（医療法人社団 KNI、株式会社 KMSI、NGO 日本医療開発機構）は総合生活産業としての医療を実現するために、既存の医療の枠を越え、ITを含む最先端技術から教育、農業、物流に至るまで全ての力を結集して様々な医療改革を行っています。

医療の産業化の一つとして、日本医療の輸出も行っています。北原グループが行う医療輸出は、途上国の富裕層を自国に呼び込み高額な医療を提供するインバウンドのメディカルツーリズムではありません。私たちが進めているのは、途上国に入り込み、地産地消の医療、総合生活産業としての医療を現地に根付かせることを目的とするアウトバウンドの医療輸出です。サンライズジャパンホスピタルでも、病院を建てるだけでなく、運営システム、教育システム、レストラン、ITインフラなど病院に関わる全てのノウハウを提供し、カンボジアの国と医療の発展に貢献します。また、医療に対する規制の少ないカンボジアだからこそ出来る医療システムやサービスの開発を行い、それを日本に逆輸入することも目指しています。

NGO 日本医療開発機構とは？

NGO 日本医療開発機構（JMDO）は、2010年1月に北原グループ理事長、脳神経外科医の北原茂実によって設立された北原グループの1組織です。北原グループの理念である「医療＝総合生活産業」を世界に輸出する事を理念に、カンボジアだけでなく国内外で活動しています。カンボジアでの活動は、2011年12月より開始しました。“Better quality of medical / health care for Cambodians by Cambodian medical staffs”を目標に掲げ、将来的にカンボジアの医療者のみで良質な医療が提供できるようになることを目指しています。カンボジア国内では、これまで、医療は「整備された医療環境」と「教育された医療スタッフ」の双方がある事で発展すると考え、「国立病院における医療環境の向上」、「医療者養成校、医療機関における医療者 学生への教育提供」を行ってきました。また、サンライズジャパンホスピタルを設立するためにカンボジアの医療状況の調査や、人材教育も行ってきました。



Japan Medical Development Organization

NGO 日本医療開発機構

カンボジアと、その医療状況

カンボジアはタイとベトナムに挟まれた東南アジアの国です。2014 年のカンボジアの総人口は約 15135 人、2014 年の平均寿命は 72 歳と報告されていますが、平均年齢 26.8 歳と日本と比較するとかなり若い国です。平均年齢が低いことで発症率が抑えられてきた好発年齢が 50 歳以上の脳卒中などの疾患はこれから急増することが考えられます。それに伴い、カンボジアの国立病院は脳卒中医療に対して力を入れ初めており、海外の病院も進出してきてます。しかし、現在でも十分な医療環境が整っているとは言えない状況です。カンボジアでは 1975 年から 1979 年のポル・ポト政権時代に医師、教師、法律家などの知識人が多く殺害され、その後も内戦が続いたことから、現在に至るまで医療従事者の絶対数が不足しており、かつ人材育成の状況も不十分です。カンボジア国民の自国医療への信頼は低く、富裕層はシンガポール、タイ、ベトナムなど近隣の国に医療を受けるために渡航し（メディカルツーリズム）、貧困層はカンボジアで医療を受けるしかなく基本的な治療も受けられない状態です。

近年、急激な経済発展を遂げているカンボジアですが、医療は ASEAN 諸国の中でも、決して質がよいとは言えず、発展から取り残された状態です。特に脳神経外科領域は質が低く、たとえ国立の病院であっても脳卒中、脊髄疾患の患者さんは適切なケアを受けられず肺炎を発症したり、褥瘡が出来てしまう、リハビリを受けられず寝たきりになってしまう患者さんがたくさんいます。カンボジアの医療が発展出来なかった理由として、先に述べたポルポトによる知識人の大量虐殺により医療者が激減したことと、メディカルツーリズムで本来なら国内で使われるべき医療費がタイやシンガポールベトナムに流出してしまい医療の発展が阻害されていることが挙げられます。



カンボジアの経済発展

地雷があって危ない、遺跡が有名、貧しい国、そんなイメージのカンボジア。もちろん遺跡や地雷もありますが、実はカンボジアは急激に経済発展している国です。その経済成長率は東南アジア 1 位。北原グループが運営する救命救急センター、サンライズジャパンホスピタルがある首都プノンペンでは現在、高層ビルの建設ラッシュ中で日本では考えられないスピードで町が変わっています。また車も増えており、交通渋滞が社会問題に。道路も増えていますが追いつきません。日本企業もたくさん進出してきており、3 年前に出来たイオンではスターバックスのコーヒーを飲んだり吉野家の牛丼を食べることが出来ます。



NGO 日本医療開発機構スタディツアー
カンボジア 医療を感じるスタディツアー
スケジュール

8月9日

プノンペン到着、ホテルで待機

19:00 : 夕食

8月10日

9:00 : カンボジアの医療状況、北原グループのカンボジア事業についての講義、
スタディーツアーオリエンテーション、質疑応答

12:00 : 昼食

13:00 : サンライズジャパンホスピタル見学

15:00 : カンボジア国立コサマック病院見学

19:00 : 夕食

8月11日

8:30 : サンライズジャパンホスピタル見学

11:30 : 昼食

13:00 : プノンペン国立母子保健センター、メディカルストリート視察

19:00 : 夕食

8月12日

8:30 : サンライズジャパンホスピタル見学

11:30 : 昼食

12:30 : サンライズジャパンホスピタル見学

19:00 : 夕食

8月13日

9:00 : 市内観光（トゥールスレン博物館、セントラルマーケット）

12:00 : 昼食

13:00 : 市内観光（AEON、王宮）

19:00 : 夕食

22:30 : プノンペン出発

8月14日 日本到着



サンライズジャパンホスピタルプノンペン

カンボジア人医療者は北原グループで研修

北原グループの1組織である株式会社 KMSI は、日揮株式会社、産業革新機構と合併会社サンライズヘルスケアサービスを設立し、サンライズジャパンホスピタルプノンペンを2016年10月にカンボジアの首都プノンペンに設立しました。サンライズジャパンホスピタルは10床のICU、一般病床、VIP 病床、2つの手術室、最新のMRI、CTを備える病院で、約20人の日本人医療スタッフと日本で研修を受けた約100人のカンボジア人スタッフによって運営されています。救命救急医療や一般内科、一般外科、消化器内科、循環器内科、脳神経外科、脳血管内治療、神経内科、リハビリテーション、日本とのネットワークによる遠隔診療、健康診断など日本水準の高品質な医療サービスを提供します。また、医療サービスの提供だけでなく、運営システムや教育システム、患者給食、IT インフラなど医療に関わる全てのノウハウをもって、カンボジア王国の医療インフラの発展に貢献することを目指してまいります。

カンボジア人医療者は北原グループで研修

サンライズジャパンホスピタルで働くのは北原グループのスタッフ約20名とカンボジア人スタッフ約100名。カンボジア人スタッフのほとんどは、2015年度に当法人で研修を行いました。日本で研修を行ったのは日本の「思いやりの医療」を学ぶため。カンボジアでは文化の違いもあり、医療者は「患者様の目線で物事を考える」、「チームで協力して動く」などを教わってきていません。知識や技術も必要ですが、日本の医療をカンボジアで提供するためには、実際に文化に触れ、日本人の考え方を学ぶ事が重要だと考えました。

カンボジアで新たなシステム開発を

サンライズジャパンホスピタルでは NEC と共同開発している他言語対応型クラウド問診システムや、それと連動する電子カルテシステム、将来的に貧困層にも適切な医療を提供できるようにするための独自の会員サービスの開発を行っています。カンボジアのような医療途上国で日本と同等の質の医療を貧困層を含む全ての人に届けるためには、医療の合理化、効率化が必要となります。それを開発し、日本に逆輸入することで日本の医療状況を改善することも、視野に入れています。



国立コサマック病院

1950年に地元の僧侶のための病院として設立された、プノンペン市内の国立病院のひとつです。総病床数は200床で、標榜科目は一般内科、脳神経外科、眼科、耳鼻咽喉科、消化器科、泌尿器科、小児内科、小児外科、産婦人科、呼吸器科、悪性腫瘍、精神科、皮膚科、感染症、糖尿病で、ICU、救急病棟を備えています。比較的低所得層の患者さんが利用する病院です。資金不足から物資と設備・機器のメンテナンスが慢性的に不足しているせいもあり、国立病院のなかでは最も設備の老朽化が著しい病院です。



国立母子保健センター

国立母子保健センターは、首都プノンペンに位置し、3つの機能（行政・臨床・研修）を兼ね備えたカンボジア最大の産婦人科病院で、1997年に日本の無償資金協力により建設され、日本が同センターに対し長年にわたり技術協力等を実施してきたことから、現地では「ジャパン・ホスピタル」と呼ばれています。カンボジア人の50人に1人、1日平均20人の赤ちゃんがここで生まれています。

メディカルストリート

カンボジアには自国の製薬会社は皆無で、日本製の医薬品はほとんど流通していません。流通している薬はフランス、シンガポール、タイや中国、インドなど海外から輸入したものが混在した状態で、中には表記通りに成分が入っていないものや、そもそも有効成分自体が全く含まれていないような偽物が多く出回っていると言われています。

病院で処方箋を渡された患者の多くは薬局や医療機器等の販売店が集中しているメディカルストリートと呼ばれる商店街にて必要な薬剤を調達します。



セントラルマーケット

中央にドームを持つアール・デコ調の建物は、1930年代に建てられたもの。ドームを中心に十字型に延びる建物内にはジュエリーや雑貨など観光客向けの土産物が売られていますが、外周はローカル色あふれる生活市場。新鮮な野菜や日常のおかずになくせない魚介類が所せましと並ぶかと思えば、子供服や鍋釜類などの生活必需品が雑多に置かれていたり、地元っ子が屋台料理に舌鼓を打っていたりと、アジアらしい活気と喧噪を満喫できます。



トゥール・スレン博物館

クメール・ルージュ（カンボジア共産党）支配下のカンボジア（民主カンボジア）において設けられていた政治犯収容所です。稼働中は存在そのものが秘密であったため公式名称はありません。現在は地名を取ってトゥール・スレンと呼ばれており、国立のトゥール・スレン虐殺犯罪博物館となっています。2年9ヶ月の間に14,000～20,000人が収容されたと言われ、そのうち生還できたのは8人のみでした。



王宮

トンレ・サップ川沿いを散策していると見えてくる、黄金色の大屋根とクメール様式の尖塔がひととき堂々たる建物が、現カンボジア国王と王妃が暮らす王宮です。王宮そのものは外から眺めるだけで中に入れません、隣接するシルバーパゴダは内部も見学可能。室内に無数の銀製のタイルが敷き詰められていることからこの名で呼ばれるシルバーパゴダには、17世紀頃の作と伝えられるエメラルド製の仏像や黄金のブツダ像、インドの神話『ラーマヤナ』を描いた壁画が周囲を取り囲むなど見どころ満載です。



イオン

2014年6月30日に正式オープンしました。核店舗となるスーパー「イオンブノンペン店」と約190店舗の専門店（日本からの出店テナント49店舗）、国内最大のシネマコンプレックス、スケートリンク、約1,200席を擁するカンボジア最大のワールドフードコートやレストラン、ヘアサロン、リラクゼーション施設、アフタースクール（ダンス、料理、英語、キッズジムなど）などで構成されるカンボジアで最大規模となる地上4階建てのショッピングモールです。

